
赤の唄

ニーチェ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤の唄

【コード】

N50390

【作者名】

ニーチェ

【あらすじ】

気づくと13年の月日が流れていた。

第一章 邂逅1

目の前の光景がただ、信じられなくて。

寂しさや悔しさ、行き場の無い怒りが、これまでに無い程身体を熱くしている。それは体内の水分を蒸発させ、不意に視界を朧げにする。

『なんでこんなことになったのかな？』

知らん。

『何処で俺達は間違えたのかな？』

何処でもいい。

『もう、止められないのか？』

そうだ。

『そっか』

言いたいことは言った。あとはもう、戦うしかない。長物の太刀を構えた相手は、こちらが構えるのを待ってる。

待たしちゃいけないや。

一陣の風が吹き、開始の合図を告げた。

最初からわかってた。叶わないことくらい。それでも俺は、あの日常を取り戻せるモノなら取り戻したかっただけさ。

俯せの状態からなんとか仰向けになることが出来た。見上げた空は広いハズなのに、とても狭く感じる。いや、狭いんじゃない、そう見えてるんだ。

ヤバい。なんか気持ち良くなってきた。周りから音が消えて、世界のカケラが集まって来る様な錯覚を覚え、ゆっくりと目を閉じた。

眩しい。

目を開けようとすると、容赦なく太陽の光が針の様に網膜を突き刺す。

感覚を頼りに右腕を動かし、日の光を 軽減する。上体を起こし、指の隙間から辺りを見る限り、此処は病室のようだ。ハッキリとは見えないが、薬品の臭いから病室と判断することにする。

何かなんだか？

と、そこへ。

「やっと、目を覚ましたな。」

この声は聞いたことがある。語尾が強く、それでもどこか優しい声。

「アキ・・ラ？」

長くもなく、短くもない朱いみがかつた茶髪。白いシャツに黒のストライプパンツ。

アキラは苦い顔をして首を横に振った。

「俺は、アキラなんだけど、アキラじゃない。」

俺は寝ている間に聴覚がおかしくなったのか？と、疑問を持った。だが、アキラの罰の悪そうな顔を見ると、そうでないと察した。

「意味が解らないって顔にかいてある。まあ起きぬけに、んなこ

と言われたら当然だよな。」

なんて顔してんだよ。

アキラ？は申し訳がなさそうな、苦しそうな顔している。まるで、嫌な仕事が回ってきたぞと言わんばかりだ。

「まずさ、自分の事はどれくらい覚えてる？」

質問の意図がイマイチ解らずも、良いから答えるよ、と少しの焦りを滲ませた彼の言葉に続けて答えた。

「黒野純也、24歳。性別は男、黒野家長男、一人っ子。趣味は読書に音楽鑑賞。……んなもんかな。」

おおよそ一般的な自己紹介をしているみたいだ。

アキラは口元に手を当てしばらく考えていた。

「今の西暦は？」

「1999年だろ？」

あちゃー。という吹き出しが出そうなくらい、天を仰いでいる。

「やっぱり覚えていないのか。今は 2012年なんだ。」

はあ？なにいつてんだよ。全然面白くねえんだよ。と一蹴したいくらいの冗談だ。しかし、アキラの顔は大まじめだった。

「今は、2012年。お前は眠っていたんだ。13年間。完璧な

睡眠状態、ホントに死んでいるみたいだった。」

震えるような声を出すと、しばらくの間沈黙が流れた。

「いや、でもホントに良く目を覚ましてくれた。」

目尻に涙を浮かべながら、満面の笑顔で見つめて来るその瞳が、ああ本当なんだ、と実感するには十分だった。しかし、同時に戸惑いと疑問が限りなく溢れてきた。ソレを一個ずつ整理して問いただした。

まず、俺は13年間寝むりっぱなしだったことを再確認。此処がアキラの勤めている病院だということも発覚。アキラが医者になった、その事実には実はかなり驚きながらも、必死で隠す。

「こんな症例診たことないから、医者以外には接触を禁止する。なんて言われたら、医者になるしかねえじゃん。」と言っているが、たった一年間で成し遂げるには並大抵の努力ではなかったはずだ。強い友情を感じつつも、照れ臭いので「そうか」とさらっと流す。

「なんでこんなことになったんだ？」

意気揚々と動いていた口が、まるで電池が切れたおもちゃの様に動くのを止めた。

「俺達は　　いや、正確に言うと『純也以外』は全員一度死んだんだ。」

なんかもう驚くことに慣れたから、よっぽどの事がない限りこれ以上は無いなと思っていたんだが。軽くその上をいかれた。

「13年前、俺達は、ある遺跡を調査していた。」

「遺跡？なんで遺跡なんか？」

「ほら、一人いただろ？遺跡マニマが。あいつが、調査を手伝ってくれて、皆借り出されたんだよ。」

「遺跡マニマ？」

おうむ返しに聞き返してしまった。てか、そんなやつ居たっけ？

『遺跡には、世界の記憶が残されているんだ。』

不意にそんな言葉が頭を過ぎる。そして思い出した。

「夏美か　　そうだ、あいつが今度ご馳走するから手伝ってくれて。皆も渋々納得して、それで。」

「そうだ。あの時俺達は夏美に頼まれて、遺跡の調査を手伝っていた。そして見つけてしまった。」

そこでアキラが頭を垂れた。話したくない、と言った様子だ。だが、俺にはそこが一番大事なことになるのではないのか？早く聞かせてくれ。と、瞳で訴えかけると力なく話しを再開した。

「俺達は見つけてしまったんだ。神の力を。ただそれは、偶然見つけてしまったんだ。」

神の力ってというのは、ちょっと傲慢かな、と慌てて付け足した。

微笑む顔はやはり、俺の知っているアキラにそっくりである。

「遺跡には俺、純也、夏美　　の三人で行ったんだ。」

明らかに不自然な間だ。アキラだけに。

「さっきの皆っていうのは3人のことか？一つ言わせてもらおうと今の俺にはお前の言葉だけが頼りなんだ。俺に気を使う必要なんてないから、気にせず本当の事を言えばいい。」

やっぱり純也は純也だな。

そう前置きした後にアキラ？は話しはじめた。

「まず、遺跡調査に参加したのは全体で50人くらいだった。そして俺達、純也に、俺、発信源の夏美、夏美の兄の柁さん、夏美の高校時代の先輩の冬子さんと、最後に俺達の恩師だった織田先生　　の6人だ。」　途端に、フラッシュバックが起きた。懐かしい記憶が脳裏に甦った。ところどころ抜けていて、断片的にだけ。

「はあ！？一体いつそんな話したよ！」

夏美の元担任、織田先生に、俺達の母校である『神崎高校』に呼び出された。

先生が言うには、夏のお盆から8月末まで遺跡の探索に参加が決定した、と言うものだった。既に、メンバー5人の名前は登録済みで、追加も大歓迎だという。

「ちよつと、待つてくださいよ。俺達にも予定というものがあるんですが。」

「ほお、では一体どんな予定があるの？」　なんで先生口調なんだよ？先生と並んで教壇に立つ夏美は、ニヤニヤしながら追及してくる。

先生は長い白髪混じりの黒髪を後ろで束ね、薄汚れた白衣を着ている。風貌のせいか35歳の割に老けて見える。その横で、まるで助手の様に腰に手を当て威張る夏美。こちらも、まだ綺麗な小さい白衣を着ており、ブラウンのショートヘアが日光に反射して眩しい。

「だめだ」と心の中の俺が白旗を情けなく振っている。

隣に座っているアキラをちらつと見た。小さく両手を上げていた。

「俺は無理で〜す。バイトがあるんで。」

その手があつたか!!

「スイマセン。実は俺とアキラもバイトがあるんで 欲しいものがあるわけでした。なんでちよつと無理です。」

少し離れて、後ろに座る柁に視線を動かす。柁さんは、さりげなく親指を立てていた。当然ソレを返す、俺とアキラ。

夏美が憤慨しながら、「絶対嘘だ!」

「先生!信じちゃダメです!!」等など叫んでいる。

「まあまあ、落ち着いてください夏美さん。」

先生のその言葉に夏美も落ち着きを取り戻したみたいだ。先生がズレた眼鏡を中指でくいつとする。

「三人は欲しいものがある、バイトだから無理、と言うことですが、こちらもバイトです。ただ、賃金は比べられないほど、違います。まあ例えて言うなら、平社員と課長程の違いです。ええ、大した違いじゃありません。ですが、それプラス、こちらにはご褒美が待っています。」

当然というか、不平、不満を口にする者が半数以上いたが、『格高

の賃金と褒美』があるとのことで無言の服従を誓うことにした。

そして、俺達はその会議から三日後、遺跡の調査に向かった。

遺跡は信州の山々に囲まれた一画の森にあった。朝の7時に学校を出発してから10時間。到着した頃には既に日が傾いていた。

遺跡は、まるでテーマパークにある、一角のアトラクションの様だった。

元は集落だったのか、中流階級の一軒家より一回り小さい建物が10世帯程並んでいた。

薄い橙色の壁は元は赤色だったのかな。だとしたら、派手な装飾だなと思った。

名前のわからない木々の蔓が、所々に絡みついているのが見られる。

「圧倒されるな、なんか。」

「ええ。威圧感みたいなものを感じます。」

「そうか？俺は何も感じないけど。」

アキラは少し黙っててくれ。

「そういえば、先に作業している人達は？何処にも見当たらないけど。」

冬子さんが不思議そうに、辺りを見回す。俺もつられて辺りを見

回す。

「たぶん、ミーティングでもしているんだと思うよ。もう日も傾いているし、今日の作業も終わっているはずだよ。」

「あつ！あそこ！！」

冬子さんが遺跡の一番奥。周りの遺跡より一回り大きい遺跡を指差した。

遺跡からぞろぞろと人が出てくる。

「君達はここにいて。僕の知り合いがあそこにいると思うから、探してくるよ。」

遺跡に向かう先生。俺には、その背中が逞しく思えた。このような場所で、泥に塗れて作業する先生を想像すると、格好いいとな、と思ったからかもしれない。

別の世界に来たみたいだ。

俺は誰に話しかけるわけでもなく、感想を口にした。

「まあ、それだけ疲れたってことだろ。」

「ソレはちょっと違うよ。疲れているから、ってのもあるけど、やっぱりこの自然が作り出している雰囲気大きいんじゃないかな。」

柁さんが応えて間もなく、夏美が補足した。

確かに夏美の言うとおりだ。

程なくして、先生が戻ってくると、皆でキャンプ地に移動した。キャンプ地は遺跡から5分くらいの場所にあった。

「少し休憩していてくれないかな。今日の献立を聞いてこよう。」

そう、言われた俺達はテントが並ぶ少し離れた所に腰を下ろした。

澄んだ空気に、目の前に広がる大自然。鳥や虫、近くを流れる川の音が繰り出す演奏は、一流のオーケストラでも奏でることは難しいだろう。

皆も、この何とも言い難い初めての世界に想いを巡らせているみたいだ。

「あゝ、腹減った。」

雄大な世界に、一際大きなノイズが紛れ込んできた。

「ホントにアキラは、情緒ってもんがわかって無いよな。」

「ホントよね。今ので人生の5%は損したわ。」

柁さんと冬子さん二人同時に注意されたことから、アキラもバツが悪そうにしている。

「そりゃあ、確かに感動というか達成感もあるけどさ、空腹感も確かにあるわけで、俺としては空腹感のが僅かに勝ってたよね。」

「

夏美もため息をついて、こちらの顔を伺っている。

俺は違うぞ。と首を横に降るが、夏美は小さく微笑んだ。

いや、俺はアキラとは違うよ。ホントだって。

「アキラ君の意見に僕も賛成かな。」

さすが先生、話しがわかってるぜ。という、アキラの歓喜の声に反して、先生は淡々と話しはじめた。

「今のうちに食べて寝て、しっかりと体を休ませないと、明日の作業に響くからね。」

そうだった。

俺達と呼ばれたのは遺跡の調査の為で、ピクニックに来た訳じゃない。

先生の裏の声が聞こえたのか、皆に緊張が走った。

「とりあえず、先生の言う通りご飯の準備をしますか？お腹も空いているし。」

うん、そうだな。

ええ、そうしましょ。

何とか気まずい空気を取り払った、とその時の俺は思ったかもしれない。

晩御飯はオーソドックスにカレーライスだった。

皆で鍋を囲みカレーに舌鼓をうつその情景は、小学校の時に行ったキャンプが頭を掠めた。

「ねえ、これってさあ。小学校の時に行ったキャンプを思い出さない？」

夏美だ。小学校からの付き合いだった夏美は、今と同じく一緒に行動する事が多く、やはりそのキャンプにも一緒に参加した。

「ああ、俺も今同じ事考えてた。確か小学校5年だったけ。」

「違うよ、小学校6年の時だよ。」

「そうだったけ？」

「そっだよ、なんで覚えてないのかな。」

不機嫌な夏美にゴメン、ゴメンと軽く謝っていると、アキラが割って入ってきた。

「何二人でこそ話してんだよ？」

「いやさ、小学校ん時のキャンプに、似てるなって話してたんだよ。」

「はあ〜！？キャンプ？？俺行ってないけど。」

「当たり前でしょ。アキラと会ったのは中学校入ってからなんだから。」

アキラと初めて会ったのは中学校の入学式。俺、夏美、アキラは同じクラスだった。

先生になんでカレーにしたんですか？と何気なく聞いてみた。先生が言うには、作業時間を延ばす為にも極力他の事に時間をかけたくないけど、食事にはどうしても時間が摂られる。しかし、カレーにすれば作り置きができるし、栄養も一通り摂取出来るからだ、と言う。

「へえ〜そうなんですか。」

「てつきり、先生が好きだけかと思ってました。」

俺の後に続いて失言する、アキラの口元にカレーが付いている。既に三杯目に入ってるアキラにソレはお前だ、と言おうと思ったが、それより先に先生が。

「おいおい。そんなことあるわけないだろう。まあ、カレーは嫌いじゃないし、どちらかという好きなほうだが。」

やっぱりな。と口に出すほどオレは馬鹿じゃない。

「やっぱり好きなんじゃないですか。」

天然と書いて、ばか。冬子さんはふわふわした、意思があるのかないのか判らない口調でつつこんだ。口元にカレーがついているがそれを有り余る綺麗な容姿がカバーしている。長いストレートの黒髪を一本に束ねているのは、動きやすくする為だろう。

夕飯を食べ終えて から就寝につくまでは、自由行動だった。

「少し話さないか？」

一服していたところに先生がやってきた。

オレはキャンプ地から50メートル程離れたところで、先生と話していた。

ランタンの明かりが二人を照らし、見たことがない羽虫やらが集まっている。

ランタンを挟む様に腰を下ろして、向き合う格好となった。

「悪いね、こっちの我が儘に付き合わせてしまったみたいで。今

日は疲れただろ？」

「いえいえ！そんなこと無いです！！こちらこそ貴重な経験をありがとございます。」

少しの沈黙のあと先生は淡々と話しはじめた。

「この辺にはね、神が現れたとする山があるんだ。その神は、山の頂に現れた修道者にあるものを渡した。」

君の考えを聞かせてくれ、と目で問い掛けてくる。

「お宝・ ではないですよね？」

「そうだね。正解はね、一本の剣だった。」

「剣ですか？なんでまた神様は剣を？」

ほくそ笑んだ先生は、それはわからないと続ける。

「ただその剣は、実在した剣でね。古くから伝えられた由緒正しい剣なんだ。化物退治に使われたという話もあるし、戦でその剣を振った者は英雄扱いだ。」

ランタンに飛び込む虫達が、華麗に燃えては消える。僕にはそれが、剣を振るう英雄と薙ぎ払われる戦民に見えた。

「そういつた話しは全国のおちこちにある。それが本当かどうかはわからない。ただ。」

「ただ？」

「ただ、僕にはそれが、通りすがりの人が子供におもちゃを与えた。そんな感じに思えるんだよね。そのおもちゃのせいで、周りの子供が怪我をしても」

『私は知りません』『関係ありません』『使い方が悪いんです』
みたいな。僕にはそれが許せない。」

つまらない話しをして悪かったね、と一瞥をくれて先生は皆の元にもどっていった。

なんでそんな話をその時、俺にしたのか？

今ならわかる。

理解できる。

先生の思いが。

四日目の朝、異変が起きた。夜間の作業をしていた人達が、遺跡

の奥から『何か』を発見したらしい。

「なんだろうな！？お宝って！」

「まだ、宝って決まった訳じゃないでしょ。」

アキラと夏美が、興奮と冷静を交えている。

どうやら周りもその話に持ち切りらしい。喜ぶ人や、思案にふける人がごちゃ混ぜになっている。

現在、リーダー格の人達だけでミーティングをしている。先生も参加しているようで、作業をしている者もない。

「純也は何だと思う？」

気づくと夏美が横にいた。

「どうかな、よくわからないや。でもミーティングが長いし、核心に近いものが見つかったんじゃないのかな？」

「アキラは、宝、宝、って言ってるけど、そんなものこの遺跡には無いのに。」

だよな。と相槌を打ちつつ、宝が良いなと期待する自分がいた。

そして、しばらくしてから先生達が出てきて

o

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5039o/>

赤の唄

2010年10月30日19時26分発行